

戦争に対する戦争

はじめに

20世紀は「戦争の世紀」だったと言われる。「戦争と平和」はグローバルなテーマとして今後永遠に人類の課題となるであろう。本勉強会では、戦争の新たな局面を捉えつつ、これからの戦争と平和がいかなる様相を呈するのか考察したい。

1. 〈帝国〉内戦争へ

- ・国民国家とネットワーク状の敵

「国家とは、ある一定の領域の内部で一この「領域」という点が特徴なのだが一正当な物理的暴力の行使の独占を（実効的に）要求する人間共同体である」〔ヴェーバー『職業としての政治』P9〕

→暴力の組織化と流動化、「ラウム」「例外状況」（シュミット）

- ・警察行動と軍事行動

「ポスト近代の戦争は、近代の戦争よりももっと戦争らしさの欠けた何がしかであり、また近代の警察よりももっと警察的な何がしかである」（『〈帝国〉をめぐる五つの講義』P195）

→帝国主義的利益と〈帝国〉的利益、「人道的介入」

- ・近代戦争から生政治的戦争へ

「秩序は戦争終結から生まれるのではなく戦争の継続的な推進を通じて生まれる」（同上、P192）

「戦争は秩序を保つ力となり、逆に平和は無秩序の力となるように思われます。（中略）戦争は平和の維持なのです。戦争は平和の覗き見であり、平和の取り締まりをするのです」（『生政治的自伝』P173～175）

“*What appeals as civil peace, then, really, only puts an end to one form of war and opens the way for another.*” (Multitude P12)”

→秩序維持の力としての戦争、終わりなき永続的な戦争状態か

2. 純粹戦争

- ・〈^{ドモロジエ}速度術〉 → 科学 → 技術（可能にするものとされるもの）
- ・速度制社会と無能な身体（理性と「魂なき身体」）
- ・地球規模の「非安全地帯」の創出と「同時性」

3. 新たな戦争と新たな反戦

- ・集権的人民軍 centralized armies、多中心的ゲリラ polycentric guerrilla、分散的ネットワーク distributed networks
- ・遊牧民的「抵抗」と「脱出」(〈帝国〉諸機構の内破)
- ・〈共同的なもの〉の組織化、世界社会フォーラム (WSF) の可能性

おわりに

かなり理想的、ユートピア的な見方となっていることは否めない。しかし、「平和」は常にユートピア的な何かである。「どこにもない場」であるからこそ、それを求める努力を放棄するのではなく、絶えず求め続けることが必要である。(帝国) はまさにその過程を叙述する一つの平和的プロジェクトのように思われる。

【参考文献】

- ・ Michael Hardt, Antonio Negri "Multitude-War and Democracy in the Age of Empire", The Penguin Press, New York, 2004
- ・ アントニオ・ネグリ 『〈帝国〉をめぐる五つの講義』 青土社 2004年
- ・ アントニオ・ネグリ 『ネグリ生政治的自伝一帰還』 作品社 2003年
- ・ ポール・ヴィリリオ 『速度と政治』 平凡社 2001年
- ・ ジャイ・センほか 『世界社会フォーラム帝国への挑戦』 作品社 2005年
- ・ 萱野稔人 『国家とはなにか』 以文社 2005年